

研究報告書

1. 研究テーマ

人道的支援活動につながるポジティブな心理過程の検討とその教育への応用

2. 研究組織

研究代表者	教授	島井哲志	(日本赤十字豊田看護大学)
共同研究者	教授	遠藤公久	(日本赤十字看護大学)
〃	教授	河合利修	(日本赤十字豊田看護大学→日本大学)

3. 要旨

本研究では、日本赤十字社を支えてきた先人が、どのような経験によって、人道的支援活動に向けて成長していったのか、また、学生たちが、どのような経験によって、人道的な態度と行動を形成していくのかを検討した。本学では、カリキュラムに「赤十字原論」などがあり、赤十字の基本原則の「人道」という態度と行動を理解することをめざしている。一方、赤十字という名前がついていなくても、地域や世界の子どもたちへのボランティア活動を行う学生たちがおり、このような自主的活動から、学生たちが大きく成長し人材として育てられていると実感する。ポジティブ心理学の研究からは、感動などの情緒的経験が、多くの人たちのポジティブな徳性の育成につながり、それぞれの得意とする特性を活かすことで大きく成長すること示唆されており、ここでは、人との出会いを中核とする経験が、「人道」につながるポジティブな変化をもたらしていることを示した。

4. キーワード

赤十字、人道、人道的支援、教育、ポジティブ心理学

5. 研究報告

世界の人道支援の重要な一部分については、赤十字国際委員会(ICRC)や日本赤十字社などの赤十字組織が担っているといえる。これは、赤十字が、国際的に認められた、公平で中立、かつ、独立した組織であり、その使命として、武力紛争およびその他の暴力の伴う事態によって犠牲を強いられる人々の生命と尊厳を保護し、必要な援助を提供することをめざしているからである。

一方、本学をはじめ、日本赤十字学園に所属する看護大学では、各地の赤十字病院に

優秀な看護師を供給することが目標のひとつとなっており、他学に比較すれば災害看護に時間をかけた教育が行われているものの、当然ながら看護師養成に準拠して赤十字病院で重要な急性期看護を中核とした看護教育を実施していることが多いだろう。

もちろん、人材育成は、大学といった教育機関のみで行われるわけではないが、赤十字の使命を考えるならば、看護大学の卒業生の中からも、国際的な人道支援に貢献するような人材が生まれてほしいものである。このためには、人道の原則と、それに基づく支援について理解のある人材を育成することができることが望ましいと考えられる。

この研究は、その第一歩として、ポジティブ心理学を基盤として、赤十字における人道に基づく教育の基礎的資料を提供することをめざしたものである。

ここでは、下記の3種類の方法を用いて検討した。なお、Ⅱの研究がやや遅れてしまったことに伴って、計画として、Ⅲで実施することになっていた質問票の開発が困難になり、学生を対象とした研究は、質問紙調査ではなくインタビュー調査に切り替えて実施した。以下、結果の概要を報告する。

<Ⅰ．既存資料の分析>

既存資料の対象としてはさまざまなものが考えられるが、当初予定していた歴史的資料の分析は、本研究の申請時には想定していなかった河合の転出のために実質的に困難になったので、ここでは歴史的分析というよりも、現在の赤十字看護の教育実践に直接的な影響力をもっている方々の言説を分析することを試みた。

そこで、ここでは、赤十字看護で長年にわたって活動してきた方々による記録として日本赤十字看護学会から記念出版された「伝えたい看護の技 ひとこと集」を素材として、デジタル化して、フリーソフトウェア茶筌によってテキスト分析を行った。

はじめに品詞別の出現頻度とスコア(後述)を示した。名詞では、当然であるが、「看護」が群を抜いて出現頻度や第1位で、次が「赤十字」であった。このことから、この資料を分析対象として用いることについての、一定の外的な妥当性があることが判断することができると考えられた。

スコアに注目すると、「看護」続いて「患者」が高く、続いて「看護師」であるが、「病棟」、「救急」、「関わり」に続いて「人道」があがっており、この著者たちにとって、看護の技を支える原理として、「人道」が大きな位置づけをもっていることが示されているといえる。これに関連して「関わり」という人間関係を示す言葉が上位にあることが特徴であるといえる。

表 1 品詞別の出現頻度とスコア

【スコアとは?】

「今日」や「こんにちは」など、一般的な単語は、どの文章にも出てきやすいため、出現回数が多くなってしまいう傾向がありますが、特徴的な単語ではありません。そのため、一般的な単語ほど重みを軽くする処理を行っています。その結果がスコアの値です。つまり、その文章に特徴的な単語(特徴語)ほどスコアが高くなります。

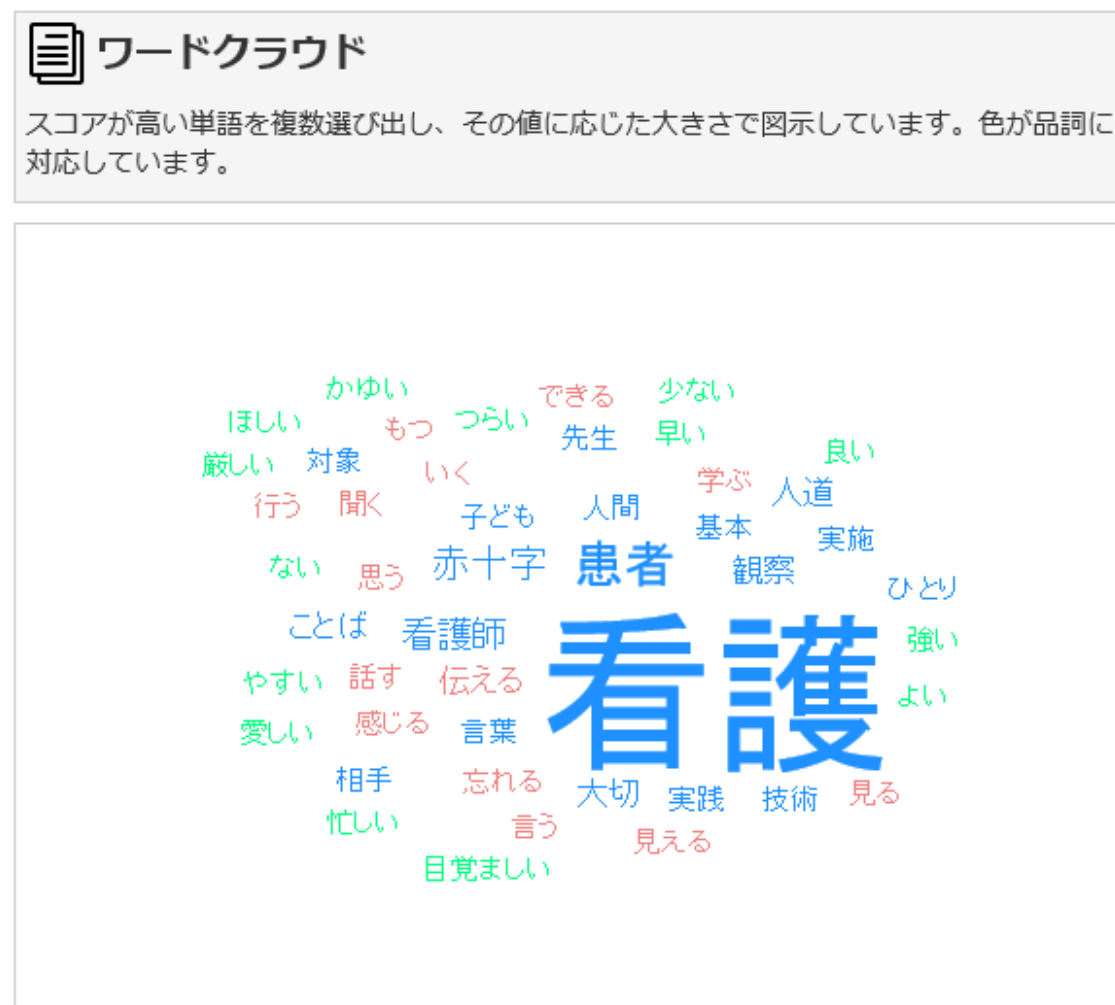
■名詞	スコア	出現頻度	■動詞	スコア	出現頻度	■形容詞	スコア	出現頻度
看護	389.40	81	思う	0.25	21	ない	0.02	6
赤十字	28.00	40	できる	0.16	13	強い	0.08	4
患者	61.54	40	伝える	1.87	11	早い	0.05	4
大切	6.05	21	聞く	0.29	11	よい	0.02	3
先生	1.68	18	見る	0.06	10	厳しい	0.08	2
看護師	18.52	16	感じる	0.48	9	少ない	0.04	2
技術	3.56	15	学ぶ	1.66	9	忙しい	0.08	2
人道	9.80	14	いく	0.11	8	かゆい	0.73	2
実践	5.10	11	見える	0.36	8	やすい	0.03	2
相手	0.61	10	もつ	0.49	7	ほしい	0.02	2
子ども	1.85	10	行う	0.23	7	愛しい	0.12	1
人間	0.42	9	忘れる	0.18	6	つらい	0.01	1
対象	1.44	9	話す	0.30	6	目覚ましい	0.70	1
基本	1.07	9	言う	0.02	6	良い	0.00	1
ことば	5.90	8	いただく	0.27	6	余儀ない	0.70	1
観察	5.36	7	考える	0.06	5	うれしい	0.03	1
言葉	0.26	7	高める	1.96	5	長い	0.01	1
実施	0.98	7	なさる	0.27	5	新しい	0.01	1
ひとり	1.23	7	整える	1.79	4	すばらしい	0.09	1
関わり	10.22	7	受ける	0.13	4	悔しい	0.03	1
生活	0.49	7	向き合う	1.10	4	若い	0.02	1
病棟	12.00	6	持つ	0.03	3	ねたい	0.42	1
舌痛	4.84	6	関わる	0.35	3	力強い	0.22	1
高橋	3.77	6	こめる	1.54	3	温かい	0.09	1
ベッド	0.29	6	望む	0.53	3	優しい	0.01	1
環境	0.78	6	残す	0.23	3	尊い	0.42	1
ケア	1.21	6	しまう	0.02	3	美しい	0.01	1
救急	12.00	6	置く	0.10	3	細い	0.06	1
すべて	0.49	6	受け入れる	0.70	3	にくい	0.02	1
後輩	1.74	6	育てる	0.21	3	望ましい	0.42	1

このスコアは、一般的な単語が出現回数が多くなってしまいう傾向を補正して、一般的な単語の重みを軽くして、特徴的な単語を見つけるための分析であるが、この資料中では「人道」が大切なキーワードになっていることを示している。

動詞では、「高める」「伝える」のスコアが高く、次いで「整える」「学ぶ」「こめる」であった。名詞においても、人間関係に着目した「関わり」が好スコアであったことを考えると、双方向のコミュニケーションを示すと思われる言葉が上位に多く見られるのは分かりやすい。一方、心構えに関連すると思われる「学ぶ」や「整える」が上位にあることは、先にあげたスキルを支える態度を示しているとも考えることができる。

これに対して、形容詞については、頻度からはそれほど明確な特徴をつかむことができなかった。品詞としての機能からも、他の品詞とあわせた分析によって、補助的に内容を明らかにするものと考えられる。

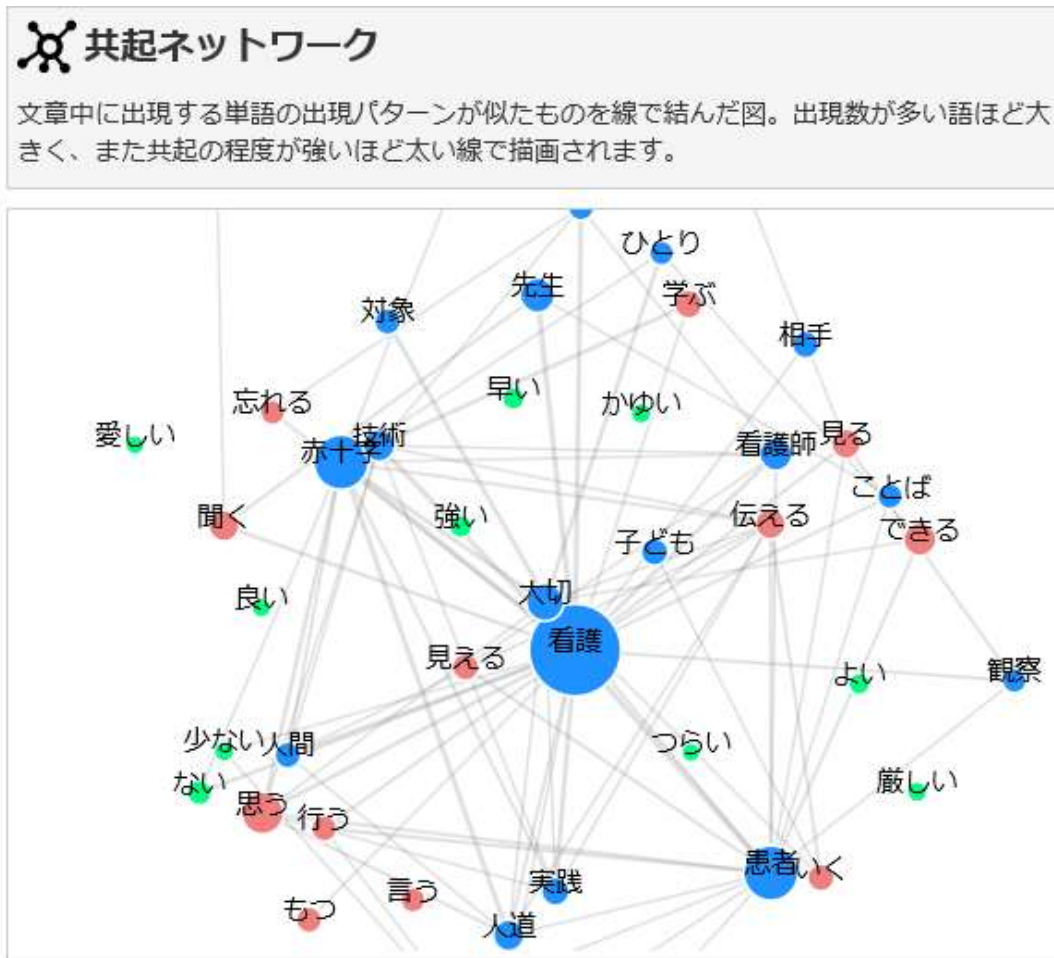
図 1 ワードクライドによる結果の図



先に表1に示したスコアのデータをより視覚的に示したのが図1のワードクラウド(言葉を雲のように示した図)である。各品詞別に色分けされているが、先に、表1でみたこととほぼ一致して、中央に看護があり、次に核となっているのは患者であるが、赤十字と看護師を合わせた部分が全体の中核を占めると読み取れる。

人道は、この中核にある言葉と比較すれば、それほど大きなものではない。これは、この資料が看護について伝えようという趣旨で編纂されたものであるのが当然であるが、そのことを勘案すれば、ここで、赤十字という言葉だけではなく、人道という言葉もしっかりと中核の一角に入っているということが、後に示すように、現在の学生たちの意識と対比すると、かなり異なるように思われる。

図2 共起ネットワークを表現した図



次に、共起ネットワークの分析を試みた。これは、文章中出现する単語の出現パターンが似たものを線で結んで図に示す方法である。図に示すことによって、直感的に把握しやすいという利点がある。ここでも、先に示した品詞別に色分け示してある。

図を見ると、中央に看護があり、これは大切という言葉と一体化しており、一方では患者と強く結びついている。そして、もう一つの大きなつながりが、技術と強くつながった赤十字である。技術と看護は先生(医師)ともつながりをもつが、この対極に、実践とつながりをもつ「人道」が位置している。

興味深いのは、ここでは、一般に想像されるように、赤十字と人道が密接につながりをもつのではない。また、技術と実践が近い関係にあるのではない。これは精緻に組み合わせられており、技術に赤十字がつながっており、一方、実践には人道がつながっているのである。

つまり、技術は赤十字で培われたものとして語られており、それを実践する場合に人道が欠かせないということになるのだろう。また、この赤十字と人道をつなぐ人間という言葉のあたりに、「思う」という動詞があり、赤十字と人道をつなぐものが、人間に対

する思いであり、それに付随して実行したり言語化したりすることが行われるということを示唆している。

以上、テキスト分析の結果を示してきたが、これらを取りまとめると、この資料から示された、人道に関連する主要な知見は、以下の通りとまとめられる。

- ①赤十字看護の熟達者においては、人道は特別な原理のひとつととらえられている。
- ②人道は、看護のめざすものと近いが同一の意味のものとは考えられていない。
- ③人道の内容的としては、看護の技術・スキルというよりも、対人的実践と近い関係にあるとされている。
- ④具体的には、人道は、患者との双方向の関わりのなかでの、態度や行動となって示される。つまり、人道は、社会的価値観やそれに基づく態度であるが、思うことだけではなく、関わりをもつ行動として具体的に示されるものと考えられている。

＜Ⅱ．川嶋みどり氏へのインタビュー調査＞

資料の分析ではなく、赤十字と人道、そして看護教育についてご意見を伺うことができる対象として、日本赤十字看護大学名誉教授で第 41 回ナイチンゲール記章の受賞者の川嶋みどり氏に、テーマを絞ったインタビューをすることでこれらの関連性と今後の課題を検討した。インタビュー日時は、2015 年 12 月 22 日の午前・午後であり、日本赤十字看護大学遠藤研究室にて実施した。インタビューは遠藤・島井であった。

なお、この内容については、氏の著作物の内容なども参照して、別に報告することも企画しているが、本報告では、インタビューに基づいた結果をまとめる。なお、インタビューにあたっては研究の意図をあらかじめ説明して、参加を依頼した。逐語的な記録は参考資料にあげた。

1) 日本における人道の歴史

日清・日露戦争の中での看護師養成ということを考えると戦争の中で必ずしも人道が十分に浸透してこなかった歴史がある。一方で、戦争こそが最も人道が求められるところでもある。そして、赤十字の人道にとっては、戦争が起きてからではなく、それを未然に防ぐということも重要だと思う。戦争の中での、人道は、人の命を守らなくなっている意味がない。教育の中では、命について学ぶことが欠けているのが問題である。

2) 看護と人道の関係

看護における人道はケアリングであり、生命を守り、健康を保持し、苦痛を予防・軽減して、人間の尊厳を確保することである。そこには、安全と安楽というふたつの柱がある。このうち、安全は危険を未然に防ぐことも含まれる。また、安楽では、苦痛がないというだけではなく、人間らしく生きているかということであると考えている。大学の教育においても、この点が重要で、かつて人道がどこかに行っていたように、看護からケアリングがどこかにいってしまっているように見える。

3) 人道の基礎

人間の特徴として、人の役に立ちたいということがある。それが、家族のかたちでは、家族のなかでケアがあったが、産業の発展に伴い、家族で手に負えない部分に対応する病院ができ看護が生まれた。だから、看護も人間的な基礎に基づいた実践である。これを母親と赤ちゃんの関係でみると、赤ちゃんは母乳を吸って至福の時を過ごし、母親は赤ちゃんを全人的にケアし、その存在で夢をいっぱい抱く。この時に、どちらも恩返しは求めておらず、ケアする側もケアされている。人道支援も基本的に同じだと考えられる。

4) 人道の教育

人道については、大学教育の中で特別に専門的に教えることはないのではないかと。それは、基本的な人間性を養うということであり、あらゆる学科に共通していることであり、人道という教育すべき学問があるのではない。人道は物をあげることであり、してあげるのではなく、人道を具現化する際には、連帯を欠くことはできない。すべての教師が、自分の学科の中で、人間の尊厳を頭に描いた話をしていかなければならない。教師と学生の関係もそうでなくてはおかしい。

5) まとめ

川嶋氏の基本的な姿勢は、人間が共通にもっている特徴を基礎に置いたものが、人間性であり、それに信頼するということであると考えられる。そのうえで、看護の実践家としての経験のなかで身につける「人道」というポジティブな価値観・態度である。その内容は、母子の例にあるように、相互的であり、どちらも見返りを求めないものである。

一方で、現在の社会制度の中では、必ずしも、その理想のような関係を築くことは簡単ではない。看護の中でも、その実践が十分にはなされていないのが現状であろう。しかし、そこにこそ、行動の原理としての「人道」を強調する意味があり、おそらく絶えず努力し続けるべきものなのであると考えられる。

教育の中では、カリキュラムの中に、人道を教えるための特別な授業が必要だとは考えられないという考えは当然であるだろう。むしろ、看護の実習の中でこそ、人道に思い至ってほしいというのが、川嶋氏の言いたいことであると思われる。

この意味で、このまとめでは触れていないが、実習にあたって、看護学生が、ひとりも印象に残る患者さんに会わない(出会いがない)ことがあるということこそが、危機的であるという話には共感した。

この背景には、スキルの習得のためには、実習にあたって、さまざまな課題の提出を求めることが重要だという主張があると思われるが、ここで取り上げてきたように、スキルが、人道に基づく、確かな実践となるためには、実習の中でこそ、患者さんに助け

てもらっている＝教えていただいている経験をしてほしいと願う。

＜Ⅲ．赤十字の看護大学生の調査＞

ここまで、赤十字看護の指導的な立場にある人たちの人道に関する考え方を見てきた。ここでは、見返りのない活動の例として、自発的にボランティア活動をしている学生が、その活動をどのように評価しているのか、また、このような自主的な経験には、これまで紹介してきた「人道」につながるものがあるのかについて検討した。

対象は、海外の小学校での健康づくり活動のボランティアを経験したことのある学生 9 名であり、2～3名のグループでのインタビューとした。事前に研究目的と匿名性が保たれることについて説明し、参加は自由意思によるものであることも説明して、同意を得た。なお、これは教育学的研究であり、「人を対象とした医学系研究に関する倫理指針」の適用範囲外であるが、実施にあたっては指針を遵守して、データや個人情報の管理、インフォームドコンセントなどを実施した。協力の謝礼として、ボールペンを渡した。

内容は、ボランティアに参加している学生は、その経験をどのように評価しているのか。また、それは人道という信念に基づいているのか。あるいは、赤十字での教育と結びついているのかについて、活動で自分が変わったところ、そのきっかけ、その変化が人生や生活に与える影響、赤十字の大学との関係、人道について、授業と考え方との関係というものであった。これらの項目について半構造化してインタビューを実施した。グループ内のメンバーは順不同で自由に答える形式をとった。

結果は、表 2 にまとめて示した。ボランティア経験は、自分自身が成長したと思わせる経験であり、直接経験することで得られたと感じていた。この結果、それまでの自分について、見方が狭かった、考えが足りなかったというように捉えることにつながっている。

この変化は、自己についての考えや感情では、基本的には、自尊感情が高くなっていると考えられた。この時に、ボランティア活動の中で、計画を立て、見通しをもつことが身に付いたという意見もあり、効力感が上昇していると考えられた。

一方、対人関係の変化としては、知らない人たちとの交流によって、色々な人に先入観なしに接することができたり、他の人にやさしくなることができたりする経験となっていた。しかし、言葉も十分に通じないということもあり、その交流は十分に不快とはいいがたいと思われた。

ただし、自分たちの活動が、果たして、相手のためになっているのだろうかということは、グループの中の話し合いでもかなり議論されているようで、ボランティアといっても、自分たちのための活動になっていないかという反省や、そういう側面があっても、やり続けることに意味があるという意見などがあり、一定の深まりが見られた。

表2 ボランティア学生のインタビュー結果

	自分が変わったと感ずること	変わったきっかけの出来事 があれば	これからの生活・人生のどう 影響	赤十字の大学で学んでいる こととの関係	赤十字の理念の「人道」につ いて	赤十字の授業とあなたの考 え方
1	海外の人に壁を感じなくなっ た。自分がしたいと思うこと を思い切ってできるよになっ た。	普段の学校生活よりも密度 の濃い交流を通じて人を信じ られるようになった。きずな ができた。	色々な準備と話し合いを通じ てもの見方が豊かになり、 目の前のことだけでなく長期 的な見方ができるようになっ た。	海外に行きたい。実践がした いという気持ちで入学してき た。	自分の活動と特別に結びつ けたことがない。	戦争での分け隔てのない活 動などは実感がわいていな い。
2	周りに流されなくなった。勇 気ができた。	子どもたちが前のことを覚え ていてくれて感激した	ひとつひとつの経験を大切に するようになった。人を大切 にするようになった。	海外の活動をしたいという気 持ちで入学。先輩に大きな 影響を受けた。	相手の立場に立って活動す る「させてもらう」というのは つながるのかもしれない。	あまり強く関係しない。
3	実際に活動したことよりも、そ のために時間をかけて準備 をしていることで成長したよう に思う。	十分に相手のことを考えない で活動しようとしたために、う まういかなかったことを反省し た。	経験を通じて活動をころころか らしたいと思うようになった。 何かをしてあげたいと思う。	ある種の自己満足なのか と思うが、自分が成長してい ると感じる。	人道を授業で聞くと、活動し ていると思う。	あまり意識しない
4	今まで考えていなかったこと に目を向けるようになった。 相手にあわせて考えることが 大切だと思うようになった。	自分たちが思っている考え 方を、ただ押し付けているだ けではないかと感じた。相手 のために言いながら、自分の ために活動している所がある と感じた。	メンバーとのかかわりを通じ て、色々な人がいることを受 け入れて、どう折り合いをつ けるかを学んだ。	今から考えると、他の大学で はあまりない活動だと思う。	人のために何かをするという ことではつながるかもしれない。 ねと言われる	ほかの大学の人からは、赤 十字だから世界をめざさんだ ねと言われる
5	文化ということがとても大き な違いがあることを感じた。 当たり前だと感じていたこと がそうではないと考えるよう になった。	環境によって、大切なものも ことなるので、その生活環境 をよく考えないと押し付けに なることを経験から感じた。	集団での活動を通じて、人を 見る目が養われた。自分が 頑張ると、相手も応えてくれ る。	はじめに参加した時は、興味 本位だったので、あまり関係 がない。	ない	他大学の人になぜ活動する のか答えられなかった。
6	何にでもプランが必要だと強 く感じるようになった。	直接の振り返りを求めないで、 いろいろなしてくれ	団体で行動することで考える ことが多かった。ボランティア は結局は自分のためのもの だと思った。	赤十字は意識していない	ほかの大学の人からはそう 思われている。	特にな
7	いかに自分が狭い世界に生 きてきたのかが分かった。ま た、今の自分のできることに あることも分かった。	色々な人と接して、人間が暖 かいということを感じた。	予算の範囲内で、どう実現す るのかなどの計画を立てられ るようになった。継続すること の大切さも学んだ。	「人道」をもっているとは思っ ていないので、あまり関係が ない。	ほかの大学の人からはそう 思われている。	予防のことを考えるように なった。
8	メディアなどの情報だけを信 じないで、実際に見ることの 大切さを感じた。	人間が暖かいということを経 験した。	いろいろな難しいことがあっ ても、何とかなる(絞り出せる) と思えるようになった。	看護となら関係すると思う。	ほかの大学の人からはそう 思われている。	特に意識しない。
9		全体的に変わった。面倒くさ いと思うことをするよになっ た。	先輩の姿を見て、見習いた いと感じた。	視野が広がった。看護だけを みるのではなくなった。保健 師もめざしたいと思うよにな った。	災害に興味のある人は多い と思う。	大学の授業の視察よりも良 いものにした。

一方、同じボランティアのグループの中では、事前の準備や、活動後の振り返りや記録集の作成など、学年を越えて交流して活動することで、授業では経験できない、深いつながりをもつことができていた。これは、特にリーダー的な役割をもった人たちに顕著であった。

また、大部分の人たちでは、このような変化は、今後の生活や人生にも大きな影響を与えるだろうと考えており、これは、自分の変化の内容として、どのようなことを述べたのかとは特に関連しておらず、基本的には、座学ではなく経験によって得たものは、大きな影響を与えるということであると考えられた。

一方、これらの経験と、自分が赤十字の看護大学生であることとの関連は特に強く意識されておらず、自分たちの活動が、人道的支援の範囲に入るものと考えているのは、ごく少数であった。

ただし、他大学の学生や、知り合いの人たちからは、赤十字の大学に所属していることと、自分のボランティア活動に関連があると言われている人たちは少なくなかった。つまり、周囲からは、赤十字の大学生だから、ボランティア活動をしているのだと思われるということである。しかし、このことについて深く考えている人はほとんどいなかった。

全体としてみれば、ボランティア活動を、赤十字の人道と結び付けて考えているものはおらず、また、自分の変化についても、人道と関連づけて理解している学生は全くいなかった。

先に、川嶋先生の意見では、授業で人道を教える必要はないということであったが、そもそも、人道という言葉や概念に対して、ほとんど馴染みがない(博愛とは全く違うものにとらえている学生がいるなど)という印象があり、これは、赤十字の人道について、個人の理念や行動の原理になるものにとらえていないということであり、一定の基礎は必要ではないかと思われた。

<Ⅳ. まとめ>

ボランティア活動については、日本赤十字北海道看護大学の山本・尾山・根元による「看護学生と看護系以外の大学生のボランティア活動と対人関係づくりに必要な社会的スキルとの関連」の報告がある。調査方法はまったく異なるが、そこでは、ボランティア活動による経験として割合が高かった項目は、「人との出会い」、「視野が広がった」、「他者理解」であり、「自分に自信が持てた」、「新たな自分の発見」や、「社会への関心」「自分の生活の見直し」はあまり上がらなかったとしている。

これは、彼らの報告の対象のボランティア学生では、不定期で1回か2回が半数以上であり、これと比較すると、今回インタビューに協力してくれた学生は、全て自分たちで計画し、活動費用も自費であり、活動期間の長さ、活動内容についてもすべてがかなりハードであったので、大変なコストを払って経験した結果として、自信が高まり生活の見直しも大きく示されたと考えられた。